

「中村敦夫さんに刺激を受けて！」

十連休の最終日（五月六日）、今日も夜から稽古！昨日もおととも、ピッシリ稽古を行い、今、とっても充実している。昨日は稽古終了後、全員参加の飲み会をしたけれど、稽古場では知りえないみんなの姿と接するってのもいいなあ〜ってしみじみ思った。

でもね・・・その昔、この「飲み会」って、私はあまり好きではなかった。

それこそ二十代前半に所属していた一応プロの劇団にいた頃、稽古終了後、必ずと言っていいほど飲み会があったのだが、酒が進んでくると、必ず他の劇団の批判ばかり・・・「自分達のやっていることが世界で一番正しい！」って感じで盛り上がり、先輩達が意気込んでいる姿を見ているとしらけちゃってね。いつも心の中で、「なんか違うよなあ・・・」って思っていた。

そんな気持ちが強くなってきたものだから、当然ながらその劇団自体の運営や、尊敬していた演出家の言う事ですら反感心が芽生えてきて、挙句の果てには、「舞台演劇」そのものにも嫌悪感すら抱くようになり、二十五歳の時、劇団を辞

めて、プロダクションの所属俳優となり、様々なテレビドラマや映画の仕事をした。ただ、ゲスト主役も何度となく経験させていた。ただ、役者として喰っていきける時期が六、七年ほど続いた。

その頃かな？中村敦夫さんと出会ったのは？当時の事務所の社長が中村企画に移動したので、私も中村企画の所属となり、付き人兼役者で敦夫さんが主演を務める映画にも出演させていただき、参議院選挙に出馬された時も、公示日前から敦夫さんにべったり付き添い、真夏の選挙も戦ったし、また敦夫さんが主催する「劇団東京クラブ」では、大蔵省（現・財務省）の官僚を批判する芝居「元」に出演して、敦夫さんの凄さと迫力をずっと身近で感じていた。

その後色々あり、子供にも金がかかる年齢に差し掛かり、悩んだ末、堅気の人生を歩むようになった・・・しかしその数年後、私はあんなに嫌悪感を抱いていた劇団なんてものを立ち上げて、気が付けば二十年の時が経ち、「劇団ふあんハウス」は私の人生そのものになってしまっただけで、飲み会でのコミュニケーションの大切さを、噛みしめながら現在に至るんだけど、それでもお世話になった中村敦夫さんの動向はいつも気になっていた。

その敦夫さんが、「朗読劇・線量計が鳴る」で全国各地を回られているのを知り、いつか行きたいなあ〜って思っていたのだが、昨日その機会が実現し、行ってきました！「野田市・樺ホール」という素敵な劇場。

キャパは三百くらいかな？客席を見渡せば、超満員！私は前から二番目の席を確保する事が出来て、ドキドキしながら敦夫さんの登場を待つと、線量計を地面近くにかざしながら前かがみで歩いてくる「老人」が登場！その瞬間、懐かしさとか、自分なりにがむしゃらになって敦夫さんに仕えていた日々とか、敦夫さんに教わった色々な事が走馬灯のように蘇って涙が出てきて、久々に聞く生の敦夫さんの声に引き込まれていく。

原発がいかにも恐ろしいものか？福島原発が収束に向かっているような空気が流れているけれど、実はまったくそんなことなくて、今でも原発の被害や恐怖に苦しんでいる人達が大勢いるって事などを、福島島の老人役の敦夫さんが強く強く訴えるんだけど、その内容はすさまじいもので、七十八歳の敦夫さんは二時間立ちっぱなし、迫力ある芝居を演じられていた！そんなパワーの源は「怒り」「興奮」「義憤」だそう。

いやあ〜変わらないなあ〜私の知って

いる数十年前の敦夫さんと全然変わらない！カーテンコールでそう語る敦夫さんの言葉を聞き、また涙する私。

終演後、楽屋に顔を出すかどうか悩んだけれど、恐る恐る楽屋に行けば、敦夫さんは最高の笑顔で迎えてくださった。

「なんだ！？よく来たなあ〜」

「俺（の考え方・生き様）は相変わらずだろ？」「君も変わらんなあ〜」等々。

二十数年の月日が流れたけれど、そこには私の知っている中村敦夫がいた。

本当は芝居の感想とか、今の自分とか、色々話したい事はたくさんあったのに、

師匠を前にすると何も言えせんわ・・・。それでも、劇団ふあんハウス公演「明日への旅路」のチラシはちゃんとお渡し、

深々と頭を下げ、敦夫さんからたくさん

の元気をいただき、私は気合を入れて稽古場へ向い、いつもよりも熱い熱い稽古を繰り返したのでした。

敦夫さん、どうかこれからもお元気に、そしてパワフルにご活躍ください。

「線量計が鳴る」

作・演出・主演・中村敦夫

全国各地で上演いたしますので皆様もぜひとも足お運び下さい。

詳細は、インターネットで（線量計が鳴る・中村敦夫）で検索してください。